

JCCA 建設コンサルタント協会

2006 年度学生懸賞論文

「日本の街は美しいですか」

『人々に愛される街を作りたい』

東京都立大学工学部建築学科夜間部 4 年

天草 正哲

この企画を知った媒体；学部内の掲示板に貼られたポスター

## はじめに

この夏、私には日本の街並みについて考えるきっかけとなる非常に貴重な機会が2つあった。1つはこの論文を書く機会であり、美しい景観と考えるときに都市の景観についての思考が自分の中からすっぱり抜け落ちていることを実感することとなった。もう一つは首都大学東京(東京都立大学)×東京理科大学による街のストック活用ワークショップ「マチオクPROJECT」に参加できたことである。このワークショップで神田の地元の方々と直接話をさせていただく機会を得たことや日本の街並みについて声を上げている建築家たちに出会えたことが私にとって非常に嬉しい出来事であった。私はこの論文の中で自身の思考の順を追って示しつつ、上記の機会が私にもたらした影響に言及しながら日本の街への思いをまとめてゆこうと思う。

## 美しい街とは

美しいと考える街並みとして私の記憶の中に残っているのは、京都の町や川越の蔵造が建ち並ぶ風景である。この時点では東京の都市景観について考えていなかった。何故なら、東京の都市には規律のようなものを感じないからだ。例えば、渋谷などは街に統一性がないためにいつの間にか新しいビルが建っている(または、いつの間にか無くなっている)というようなことがあっても周囲に埋没しやすく街並みの変化に気付きにくいのである。渋谷は美しさと無縁の存在のように無意識に考えていたように思う。時間のスピードが京都や川越とは明らかに異なり、時間をかけて作られてきた変わらない景色に比べてエキサイティングな街で面白いと思うが景観としては信用できないという思いがある。それに対して、京都や川越の風景の何を美しいと感じるのだろうか。京都は見た目だけでも町が碁盤の目状に整然と広がり、道路がまっすぐで建築もそれぞれ調和が保たれているため美しいと感じる。規律がもたらす緊張感みたいなものが美しさを作っているような気がしている。加えて、昔からの風景を残しつつ、人々が現代の暮らしで生活しているのである。古い町並みが使われながら残っているのである。京都が美しさを保てるのは使われ続けているからである。外国では、使われなくなった建築はバンダリズムの餌食になり、荒廃しスラム化してしまうことも多いようだ。

グローバルな時代になって、世界がフラットな関係になってきているとよく聞くようになったが、そういう時代だからこそ個性はますます価値を上げるはずである。京都の町はオリジナリティがあるから価値があるとも言える。イエメンのシバームの集落は世界遺産に登録されているがその景色が他のどこにも見当たらないという事実が価値を高めているのだろう。

上記のように美しい街について考えたときに昔からの景色を守っている場所が美しいという意見しか出てこなかったのである。私には景観の美しさを語る物差しが一つしかなかった。その事実がこの機会に突きつけられたのである。

## 「マチオク PROJECT」に関わって

「マチオク PROJECT」とは、端的に言うと、都心（神田地域）の未利用地であるビルの屋上を再認識し、それらをもっと魅力的にするためにはどうすればよいのかを考えるものである。私たちはあるビルの屋上から他のビルの壁面にプロジェクターからの映像を照射し神田の町に光を当てることで普段とは違う風景を作り出したり、学生の作ったショートフィルムを流すイベントを行うことにした。その映像の中に神田の歴史を振り返るコンテンツを含めようということになり、中神田五町協議会会長の犬塚寛氏にインタビューする機会をいただいた。その中で中神田五町協議会の発足理由(\*1)に交えて「人の住まない街なんて街じゃない。住環境を整えて、将来自分の子どもが帰って来て住みたいと思えるような街を作りたい。」と言われた。私は都市一般の街並み形成が行政によってどんどん押し進められて、その流れに対して私たちの声は届かないと思っていたが、ちゃんと声を上げている方がいることを知った。景観を私たち住民一人一人が作るのだという凜とした姿勢を感じ胸が熱くなった。そういう方に出会えたことが大きな収穫であった。

かつての風景に戻したいと言っているのではなくて、たとえ高層化しても昔のように下で商売をして、上に住んで生活してもらうことを望まれていた。昔は町のほとんどの人の顔と名前を知っていたが、今は近所の名前さえ知らないような状態であるようだ。この例も踏まえて、今、町のコミュニティは極大化と極小化の二極化の方向を持っているのではないかと感じた。中間のコミュニティである近所や家族の結びつきが弱くなった、もしくはなくなってしまったのではないだろうか。

プロジェクト進行と同時期に「緊急討論：首都高速埋設と日本橋川の景観を考える」と題したプレゼンテーションとディスカッション方式の講演会が8月12日にちよだプラットフォームスクウェア(千代田区神田錦町 2-21)で行われ、聴く機会を得た。これが都市景観について考えるようになったきっかけである。その中で建築史家の五十嵐太郎氏が「東北大学の学部一年生の学生に自分が美しいと思う建築の写真を撮ってきなさいという課題を出したところ、まだあまり建築に精通していない学生が撮ってくる写真をみると『美しい/醜い』『新しい/古い』の図式が出てくる。」と述べられた。同時に「私たちが考える『美しさ』って何だろう。」という疑問を投げかけられた。自分がある景色を美しいと感じる拠り所は何であろうか。この論文で書こうと考えていた自分の考える美しさの基盤が揺らいだ出来事であった。同じ講演会で建築家の太田浩史氏に質問する機会があり、その機会に『10+1 No.43』を読んでみるように薦めていただいた。その中で、氏は「(前略)所詮、現状の追認だけでは議論は成立しないのである。なぜなら都市とは変化そのものであり、出発点の差は論拠にはなりえないからである。言い換えれば、共有可能なのは都市をいかにして築いていくかという未来論でしかなのだが、(後略)」と述べて人それぞれが違う原風景を持っていることは変えようのない事実であることを指摘されている。音楽番組などで90年代の音楽が流れて懐かしいと感じる人もいれば古いと感じる人もいることと似ている。

講演会での 2 氏との出会いによって普段私が何気なく使っているきれいな景観とか美しい景観をもう一度考え直さなくてはならないと感じた。景観について語るための言葉や知識が圧倒的に足りないことを実感でき、かつ少なくとも都市においては景観より優先されるべきこと、つまり人々のアクティビティが重要であるという考えにも出会った。

### 首都高速埋設の問題についての議論から

日本橋を覆う首都高速の埋設計画が、国家的・都市再生的プロジェクトとして進行しつつある。かつての風景を取り戻そうという動きである。しかし、日本橋コレドができたり、神田の駅を新幹線の通過駅にし高架をさらに高くしようとする動きもあるようだ。このようにある場所では埋設をして、ある場所では高層化を進めるような一貫性のない政策では絶対により景観は生まれないように思う。

### 景観問題の原因は何なのか

景観について問題となる時の多くは、景観より経済を優先する人の出現である。その多くは高層化により周囲の美観が損なわれることから問題化するのだ。仮に、風景を壊す人がいてその人は外部からの人間であることが圧倒的に多い。長い時間をかけて作られたその場所が、その場所であることを示すような景観が、そこを気に入って入り込んできたはずの人が一人だけ違う風景を手に入れようとするによって壊れてしまうのである。秩序が乱れるのである。京都の借景で有名な円通寺の和尚さんは景色の中に高い建物が建ちそうになっているらしく、相当心が痛んでいたと友人に聞いたことがある。このように、新しく景観に入り込んでくる人がその風景を維持してゆく責任を免れている図式が景観問題の根っこの一つであると思う。「10+1 No.43」の中の隈研吾氏と今村創平氏の対談で隈研吾氏は「京都では、ますますぐく地価が上がっている。それは京都が景観的価値を持っているわけで、だからこそそこにマンションを建てて住みたいわけです。景観を壊す方向に向かってお金が流れるわけです。」と述べている。京都であってもしようなのだから悲しくなってしまう。美しく価値のある町ほど景観問題はデリケートである。

風景は一つ一つの建物が美しいこともそうだが周囲との距離や密度など集合から作り上げられているのだ。集落などはその典型ではないだろうか。また、密度の話から派生して江戸の町は人口密度・建物の密度の両方が高く、日本人の人間関係における繊細さや奥ゆかしさを育てたといわれている。かつて、江戸時代には周りを思いやる心が連帯感を生み、賑わいを生じさせたとされている。日本の街の美しさの衰退とコミュニティの弱体化は無縁ではない。住宅街では、人々が自分のことばかり考えるから、それぞれの家は何となく無愛想な表情なのだ。都市の住宅街では、社会に対して閉じた建築が集まり不気味な景観を作り出している。一昔、極小敷地やいびつな敷地に極小住宅をいかに建てるかという時代の流れもあったが、その敷地の中だけで完結しているものが多い。今、住宅を社会に対して開こうとあらゆる建築家が行動しているのは、そこ(社会に対して閉じた建築が作る街

並み)に危機を感じているからだ。その流れは大学の設計の授業の課題の題材になるほど今や当たり前のものとなっている。

戦後復興のために量を供給してきた集合住宅の存在も見逃してはならないと思う。生活行為の内側から見れば、時代が変わり人々のライフスタイルは多様になったので今までのnLDKでは人々の生活を包むことは出来なくなってきている。また外側からみると集合住宅は、一棟あたり何戸入っているかによっても周りの景観に影響を与えることになる。例えば、新しく計画されたマンションと付近住民による日照の問題トラブルが起きることが少なくない。日照問題と景観保護の問題は近いところにあるのではないか。

次に、軽井沢に着目する。大学の前期の設計課題で敷地として軽井沢が設定されたので、自分なりに軽井沢を分析した。軽井沢の住宅街には敷地境界に塀がなく、山小屋のような木造でこじんまりしていて、焦げ茶色などの地味な色をしているものが多くある。それは、規制がかけられているわけではなくてそれぞれの人が意識してそうなっているのである。軽井沢が心地よいのはその気候と景色だけでなく、景観に責任を持つというか自分たち一人一人が景観を作っているのだという意識のある人々が集まったからではないかと推測している。このような例から調和と美観形成はやはり密接なのではないかということが私の結論である。

某CMの中で「お金で買えない価値がある。」というコピーが流れているが、世相をよく言い表したコピーではないだろうか。経済の活性化が至上命題となり、大事なことを忘れてしまったような雰囲気を感じてしまう。日本では土地には価値があるが建物には価値があまり認められていないということを聞いたことがある。利回りを考えたらそのような論理もうなずけるかもしれない。しかし、そのような日本の社会的背景もスクラップアンドビルドを推し進めてきたことと無関係ではないだろう。景観は変化し続け大切なものが失われてきたのかもしれない。かつて、表参道の同潤会アパートメントは人の暮らしに根ざした素晴らしい景色を作り出していた。

「10+1 No.43」の中で隈研吾氏と今村創平氏の対話があり、その中で「景観法には経済的価値があるということが明らかになればいい。投資家に対して、ある場所の景観を壊すことはその土地の価値をなくすことだと明快に分からせればいいのだ。それを倫理の問題で解決しようとしているから、全然解決できない。」と述べられている。京都では、地価が高騰することで景観が壊されるベクトルの方向をそらす力が働いている。景観を守るために倫理に訴えかけることが一番だと考えていた私は青臭かったことを認めざるを得ない。正義感だけではどうにもならない問題であることを実感として知らないのである。

## 日本の街をどのようにしたいか

私は将来建築家として街づくりに貢献してゆきたい。

この論文の結論として、その立場から日本の街をどのようにしたいか考えた。

私は東京を歩いていて近所付き合いに出くわしたことはない。中野区江古田などは東京

の中で中密度の住宅街だと思うが人が外に居ないのである。美しい街になるためには人が外に出てきたいと思うような街づくりを目指していかなくてはならないと考えている。

商業地域やオフィス街では道や公園(広場)は目的空間ではなく、専ら移動空間のように思える。都市においては人が滞在できるような空間が必要である。青山通り沿いの槇文彦氏設計のスパイラルには通り側に椅子が設けられていて街を眺めるスペースがあるが、そのように部分的にしか存在していない。渋谷などはお金がないと楽しめないような街になってしまっている。建築家の太田浩史氏や都市計画家の伊藤香織氏が主宰している東京ピクニッククラブという集まりは東京の街にどれだけ人が滞在できるのか調べる活動も行われている。そして、東京にはそのような公共空間が圧倒的に少ないことを声高に叫ばれている。

スペインのビルバオではフランク＝ゲーリーのグッゲンハイム美術館が建ったが、ビルバオのもともとの景観に対してあまりにも過激な建築であるので当初は反対の声も多かったそうである。しかし、現在は以前とは違い人を呼べる町になったということで評価されている。この例は、ある建築が投入されることでその周囲までもが再び浮き上がることのよい例だと思う。

スカイラインを揃えるとか、古いものを守るというプリミティブな議論だけでは景観を考えることにはなっていないと思う。人に愛される、人が滞在したいと思えるようなそんな空間を内包した建築を作っていきたい。そして、その空間を持ち寄るように建築が集まれば、きっと活気のある人の集まる街が出来てくるのではないか。それが、私の夢である。

脚注(\*1)「ROJI-HON」(西田司他編 paper 編集室発行)P.54 より「バブルの頃に、あまりにも地上げが横行したりして全てがおかしくなって、人の住まない街となってしまったので、人が住めるような街づくりということで行政より地区計画を導入してくださいということになった。でも、昔からいる人達に法律の細かい話をしたってわからないから、じゃあこの町が時代の変わっていくなかでどうしたら人が住んでいくような町になっていくのか。そして、昔からいる人達とうまく折り合いができていくのかという、そういうところから話し合いましょうということになって、最初に『街づくり協定』を作っていたわけですよ。」

#### 参考文献

1. ROJI-HON 首都大学東京 21 世紀 COE プログラム神田研究拠点 CO-Met 神田館  
路地再生研究チーム 2005 年
2. 10+1 No.43 メディアデザイン研究所 2006 年